

親鸞仏教センター通信

 2007.
March

第21号

2007年3月1日発行

発行者 本多弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

 ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

深海からの地鳴り

親鸞仏教センター所長 本多弘之

大地震の予測が繰り返し出されている。こうなると狼少年の話よろしく、もうすっかり災害に対する準備をすることにも、熱が入らなくなっている。そろそろ諺どおり、「災害は忘れたころにやってくる」のかもしれない。これは、いま書きたいと思う宗教問題の譬喩である。求道心は、もし一念発起するなら、「頭燃をはらう」ように人を必死にならせるものであろう。けれども、日常生活の由無し事に引き回されていると、ほとんど忘れてしまうようなことでもあるのが宗教心である。

だから善導は、一念発起する願生心を「二河の白道」の譬喩で語るとき、辺際のない水火(貪欲・瞋恚)の二河の直中に、気づきにくいほどのわずか四五寸の道なのだ、というのである。「微」にして、激しい怒りの炎や怒濤のような欲望に襲われて、消えそうな道だというのである。

しかしこの道は、彼の岸にまで到っている。未来の浄土に到っている。そして、この白道に足を降ろさざるを得なくなるのは、他の方向には逃げるができないという、「三定死」(回るも死せん、住まるも死せん、去くも死せん)を自覚するときであるという。

「独生・独死・独去・独来」と『仏説無量寿経』に言われる。われらはこの人生の有限な事実の厳粛さに出会うとき、逃げることのできない孤独を感じるのである。この厳粛な事実、歴然として消えることのないものだが、われらの煩惱の意識は、このことを忘れてしまうのである。現在の事実のなかに、過去をわずらい、未来を案ずることはあっても、真実の存在の厳しさの方向には向きにくいのが、われらの日常意識の傾向なのである。

そういう愚かで鈍感なわれら衆生に、純粹なる未来から「苦悩の衆生よ」と呼びかけるものがある。それを四五寸の白道で喩えるのであろうが、それは実は「如来招喚の勅命」なのだ、と親鸞は気づいた。これは、われらからは見えにくい存在の根源のささやきなのだ、と。比喩的に言うなら、光もささない深海の暗黒に轟くマグマの地鳴りのようなものなのだ。この地鳴りは、一切衆生の存在の根源に、はるかなる純粹未来から呼びかけている声なき声なのだ、と。大地震の来襲のときには、この世の一切の人間を平等に「生き地獄」に落とす。如来の勅命は、一切衆生を平等に「自力無効」に触れしめ、広大無辺の大地に立たせようとする。方向は逆のようだが、あらゆる衆生に平等にはたらくことが、譬喩になるのではないかと思う。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」

浄土—深い闇が人間の尊さを教える—

親鸞仏教センター所長 本多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」では、2006年11月から、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」をテーマに新たに講座を開講し、その第1回から第3回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第1回（通算第52回）では、『大無量寿経』を読むにあたって、第2回では、『大無量寿経』のもつ意味について、そして第3回では、出世本懐の真実教について、それぞれセンター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者との間で活発な質疑応答がなされた。

ここでは、先に行われた第1回の問題提起からその一部を紹介する（2006年10月31日開催の第4回シンポジウムの報告は、本紙12頁を参照ください）。（越部良一）

講座開催の趣旨

現代文明の溢れる人間社会を生きているものにとって、入手できる情報の範囲はずいぶん広がってはいる。しかし、生まれてから死ぬまで、それぞれの人が与えられる自己の状況に、自分自身が納得し、こころから頷けるかというなら、決してそうではない。一般的な条件と、ことさらに自分に起こってくる事件や事実との間には、どう考えても不条理だとしか考えられない落差が出てくるからである。その落差を、仏教的表現では「宿業因縁」と教えるのであるが、この宿業因縁を自己に必然の事実であると引き受けることは容易ではない。その落差の譬喩的に表現するなら、「届かない彼方」とか「見えざる背景」と

か、あるいは「自己に負荷されている祖先の業報」とかというのであろう。これは、理知分別の計数には決して翻訳できない人間の条件なのである。しかもそれが、現実のわれらの生存を厳粛に規定している。この宿業因縁の圧迫から解放しようとする要求が、「浄土を求めさせる要求」の深みにあるのではなかろうか。（本多弘之）

人間＝闇を抱える存在

人間としての知恵が人間を苦しめる。その一番もとにあるのが、自分が自分を可愛いという思い、自我愛です。自我を感じて、自分に苦しみはじめ、自分の分別にもがくわけです。動物には、そういう苦悩がない。大体、私は犬を飼っているのですが、犬が睡眠不足に悩む姿など見たこともない。人間だけが自分の意識に苦しむ。ですから、自殺も人間だけでしょ。人間がそういう闇をもっているから、闇を止めさせようというのが、科学的発想、医学的発想だと思うのです。闇をもっていたら、それを薬で消しましょう。眠れない、それなら眠り薬をあげましょう。そういう方向です。

けれども、私は逆に、人間だけが深い苦しみを持ち、深い闇をもっているということが、人間の尊さであると教えるのが、宗教だと思うのです。そういう闇を孕んで生きていることが、人間が宗教を求める原因でもあり、そして宗教に出遇うことによって、その深い闇を超える。だから仏教に触れてみると、仏教の本質をいただいてみると、ああ、人間に生まれてよかったなど。

人間は闇を抱える存在であるということを、よくよく見つめると、闇がなくなることはない。人間の闇は人間存在に深くはりついている。浄土教という教えの、浄土を求めずにおれないという心情は、実は、浄土でない生命を人間は生きているということです。悲しみと苦しみを感ずる人間。つまり、人間は煩惱の生命を離れることができない。いくらごまかそうとしても、どこかで、ちくりちくりと突いてくる不安。比喩的に言うなら、人間の後ろに影があるように、いつも人間の闇が影としてついている。影がないということは、存在の意味が薄いということです。存在が濃ければ、影も濃いわけです。そういう意味で、「浄土」という言葉を出して、しっかりと教えの言葉を依り^よ処^{どころ}にしながら、宗教の教える意味をいただき直してみたいと思うわけです。

■ 人生を引き受ける手がかり

私はとても皆さま方の要求に応えとか、皆さまがもっている問題にお答えするとかということはできません。答えはないのです。答えを要求して聞くということが^{まんえん}蔓延して、いまの日本の文化になってしまっています。これは本当に悲しいことだと私は思います。なぜこの世に、いま私が生まれてきたのか。答えはない。不可思議なのです。不可思議の生命なのだ

けれど、ああ、この生命がありがたかったという、そういう感動をもたらしものに出遇いたいというのが、宗教を求める心だと思います。

それは一人ひとりが自分で考えて、自分で探すしかない。一人ひとりが出遇うしかない。その出遇った表現が、「ひとえに親鸞^{いちにん}一人がためなりけり」(『歎異抄』)なのです。親鸞聖人は、無限なる大悲が十方衆生を^{うるお}潤そうという願いが、私一人のためにあったのだと領いた。そういうことが、あとから尋ねる私どもにとって手がかりになるし、これに出遇うことが本当にありがたいと思うのです。

ですから、私のこのつたない営みが、皆さま方に答えを与えるというのではなくて、ご自分^ごがご自分の人生を引き受けていく手がかりの一端にでもなればと、やらせていただこうと思っているわけです。私の話のなかに、一つでも、一語でも、何か気にかかる言葉が残ったら、それが手がかりです。きっと何かあるに違いない。この智慧は、私の知恵というより、親鸞が出遇った智慧であり、三世諸仏が伝えてきた智慧であり、尊い經典として、無数の方々が命がけで伝えてきた言葉の歴史ですから、きっとそういうところに、皆さまが手に入れることのできる言葉があるだろうと、私は信じております。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

公開の本講座は、どなたでも聴講(無料)いただけます。

記

日時：2007年3月27日(火)午後6時30分～9時
4月は休講となります。

5月 8日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

参考図書：『真宗聖典』(東本願寺出版部発行)

ご希望の方は、下記にてご注文ください。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

お知らせ

過去5年間の「親鸞思想の解明」では、「浄土^{じゆつ}—濁世^{じやくせ}を超えて、濁世に立つ—」をテーマに、47回の講座を開催いたしました。本多所長の講演記録の詳細内容は、『現代と親鸞』(第2号～第12号〈2007年6月1日発行予定〉ただし、第6号を除く)に収録されています。

ご購入(単号あるいは継続購読)希望の方は、親鸞仏教センターまで、電話・ファックス・はがき・メール等でお申し込みください。各号共に1,200円(送料込)です。

現代と親鸞の研究会・第22回

現代における存在の不安と宗教

映画監督・ドキュメンタリー作家 森 達 也



森 達也 氏

2006年5月16日、東京ガーデンパレス（文京区）において、映画監督の森達也氏をお迎えして、「現代と親鸞の研究会」を開催した。森氏は、オウム事件以降、いわゆる「善」「悪」二元論が突出して、その間のグレーゾーンがまったく消えてしまっているのが現在の社会状況である、と押さえられた。そのうえで、その状況と宗教の関わりについて問題提起をいただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ オウムの側から見た社会

オウムの側からこの社会を見たらどう見えるかというのが、ドキュメンタリー映画『A』と『A2』の企画のコンセプトでした。その視点から見てきたのは、予想以上に濃密な、この社会の断面としての市民社会であり、警察であり、メディアでした。オウムパニックの理由は、「動機の不確かさ」です。つまり、オウムが地下鉄にサリンを撒いた動機について、僕たちはいまだわかっていない。やはり、動機がわからないと怖いのです。この恐怖や不安が媒介となって、共同体の内部結束力を無意識に求めてしまうのです。それがオウム事件以降の社会だと言っていていいでしょう。

「周辺事態法」「国旗国歌法」「通信傍受法」「個人情報保護法」「改正住民基本台帳法」と、国会の同じ会期中に、あっという間に法案が通過しました。さらに、オウム真理教（現・アーレフ）に対する「団体規制法」も通過しま

した。これは憲法違反です。この一連の動きは、恐怖や不安に対する共同体の結束です。しかし結束しても、まだ安心できないのです。では、どうすれば安心できるのか。一番いい方法は、まとまりのなかで異物を見つけることです。つまり、異物を全員で攻撃することで連帯できるのです。異物をいじめ、もしくは排斥します。すると今度は、その異物から報復されるかもしれない。それではどうするかと言えば、報復される前に先制攻撃を、という発想に至ります。これこそがアメリカだと思います。

第二次世界大戦後のアメリカは、ずっとこの構造です。敵がいないと安心できないのです。敵がいて、それを攻撃している間は安心できるのです。その状態に、日本もオウム事件をきっかけに入ってしまった。オウムによって日本人が変わってしまった部分、それが9・11を媒介にして世界中に広がっているというような感覚をもちます。それで、その後どうなるかと言えば、より一層、不安や恐怖が高まり、危機管理の意識が強くなっていきます。こうして、「善」と「悪」の二元論が蔓延してしまいました。本来は、善悪など厳密には分けられません。しかし、自分を「善」だと思い込むと、「悪」と対峙していくのです。

こういう状況になりますと、メディアはそれに乗じて危機感を煽ります。そしてより一層、私たちは煽られるのです。それを繰り返していくうちに、とんでもないことになります。かつて、日本はそうでした。メディアに關係する彼らは、別に日本の社会を殺伐なものにしようと思っているわけではないのです。しかし、当然

ながら営利企業ですから、やはり利益を追い求めます。その過程のなかで、資本主義経済における市場原理がはたらくと、メディアはどんどん危機感を煽る存在になってしまうのです。さらにテレビはわかりやすさを目指し、曖昧さを捨ててしまいます。そのほうが、みんなが見てくれるからです。わかりやすさへの欲求が進み、ますます「善」と「悪」の二元論化が加速し、わかりやすい指導者も待望されるようになります。いまは、面倒くさい論理はいらないのです。要するに、その是非かという二元論をみんなが取った。メディアも取ったのです。

■ 宗教の存在理由—死の恐怖と殺生の問題

僕は「なぜ、オウムがあのような事件を起こしたのか。その動機がわからないから、この社会はオウムに対して過剰に反応した」と言いましたが、でも僕は何となくその動機というか、構造に想像がついています。

宗教のレゾンデートル (raison d'être 存在理由) は、人が、「自分が死ぬことを知ってしまったことに由来する」と思います。死への恐怖です。その死への恐怖をいかに緩和するか、そのために宗教という装置があると僕は思っています。ですから、世界中を見ても、宗教のない文化はありません。人間にとって必要なのです。でも同時に、どの宗教でも、死んだ後の担保ということはとても大事な教義です。ここで、宗教のリスクが生まれるわけです。つまり、死と生を等価にする。もしくは、場合によっては、死と生をひっくり返してしまう。これはとても怖いことです。つまり、宗教が死の垣根を下げてしまうからです。あの世のほうが、この世よりもいいとなると、次々に、自殺も他殺も行ってしまうのです。これが、本当にあり得てしまうのです。

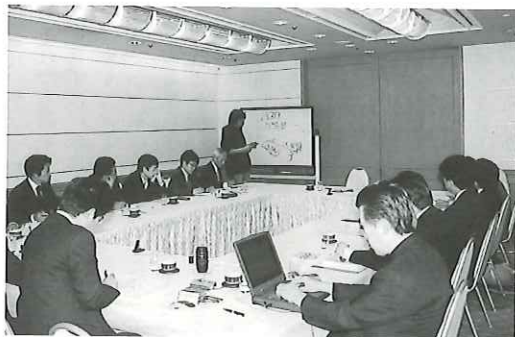
オウム事件のとき、「なぜ、人を救うはずの宗教が人を殺すのか」とみんなが怒っていましたが、僕は、もしかしたら宗教の本源的な意味合いでは、あれはあり得るのかもしれないと思ったのです。このことは、こちらにとって

は大迷惑ですが、オウムの信者にとっては善意なのです。プッシュといっしょです。いま拘置所に入っているオウムの人たちは凶暴な連中なのかと言えば、それは違います。僕は、大勢の幹部信者たちと拘置所で会い、文通をしています。みんな善良で純粋です。善良で純粋だから人を殺したのです。もしかしたら、麻原彰晃もそうかもしれない。麻原については、まだ本当にわからない部分が多いのですが、悪意ではないのです。善意なのです。良かれと思う気持ちが、人を殺める。そういった瞬間、そういった宿命というものを人間はもっているのではないかという気がします。このことはオウムに限った話ではなくて、今後、どうやって宗教というものと、僕たち共同体とメディアとが共存できるのか、それはとても大事なテーマになると思います。ただ、仏教は、善と悪との二元論ではないと思っています。皆さんの考えをお聞きしたいと思います。(文責：親鸞仏教センター)

※森達也氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第13号(2007年12月1日号)に掲載予定です。

森 達也 (もり たつや)

1956年、広島県に生まれる。立教大学法学部卒業後、テレビ番組制作会社に入社。98年、オウム真理教を追跡したドキュメンタリー映画『A』を公開(ベルリン国際映画祭に招待)。02年、山形国際ドキュメンタリー映画祭で映画『A2』が市民賞・審査員特別賞を受賞(レバノン、シリアの映画祭で招待上映)。著書に『ドキュメンタリーは嘘をつく』(草思社)、『こころをさなき世界のために—親鸞から学ぶ「地球幼年期」のメソッド』(洋泉社)、『A マスコミが報道しなかったオウムの素顔』(角川文庫)など多数。また『アンジャリ』第10号に「宗教とメディア、そして善悪の彼岸」を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」(文京区の「東京ガーデンパレス」で)

すすめいられそうろうを、ついにむなしくなるべしとそうろうなるこそ、如来に虚妄をもうしつけまいらせられそうろうなれ。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

現代語訳

辺地に生まれたひとは、ついには地獄に墮ちるに違いないということについて。

この主張は、どのような経釈に根拠があるのだろうか。学者だと言われているひとびとのなかから言い出されたそうだが、まったく歎かましいことである。

經典や論釈などの聖教を、どのように考えているのだろうか。真実信心の欠けた念仏者は、弥陀の本願を疑うことによって、辺地に生まれ、疑いの罪を償った後、真実報土のさとりを開くのだと承っている。

真実信心の念仏者が少ないために、如来は人間が実感できるようなかたちで「浄土」への往生を多く勧められているのに、「化土(辺地)」へ往生することは無意味だなどと主張することは、如来に嘘言の罪を着せようとするおつもりなのか。

語 註

①【辺地】方便化土の別名。第十一條の語註(「辺地憊慢疑城胎宮」)『通信』第十二号)並びに第十六條の語註(「辺地」『通信』第二十号)を参照。

②【化土】方便化土の略。衆生を導くために仮に開かれた浄土(「第十一條」の語註(「辺地憊慢疑城胎宮」)『通信』第十二号)を参照。

(訳・語註…親鸞仏教センター)

ふかくは、それこそ願の本意にてそうらわめ。すべて仏法にことをよせて、世間の欲心もあるゆえに、同朋をいいおどさるるにや。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

現代語訳

寺院や僧侶へ差し出す金品の額に応じて、大きな仏ともなり、小さな仏ともなると主張することについて。

このような主張は、もつてのほかであり、卑劣なことである。まず、人間が仏の大小を決めることなどあつてはならないことではないか。阿弥陀如来の身体の大きさが經典に説かれてはいるが、それは人間が感じられる形で譬喩的に表した姿なのである。

真実のさとりを開いた仏は、長い、短い、四角い、円いという形態や、青・黄・赤・白・黒という色彩をもたないのであるから、どうしてその大小を決定できようか。

念仏すると、仏の姿を観られるということがあつて、「大きな声で称えれば大きな仏が観られ、小声で称えれば小さな仏が観られる」と經典に説かれている。この經典にこじつけて主張されているのであろうか。

さらに、このことはまた布施行を主張しているということができよう。どれほど財宝を仏前に供え、師匠に施したとしても、信心が欠けていけば、まったく無意味なことである。たとえ紙一枚、銭半銭を差し出さなくとも、他力にすべてをまかせ、信心が深ければ、それこそ阿弥陀の本願のところに叶うことである。総じて仏法にことを寄せて、俗世の欲望があるものだから、このように共に念仏の教えに生きるひとびとをおびやかすのであろうか。

語 註

①「方便報身」ここでは、方便化身と同じ意味か。例えば、『観無量寿経』(第九「真身観」)には、「無量寿仏の身は百千萬億那由他の阿僧祇劫金色の」とし。仏身の高さ、六十万億那由他の阿僧祇劫なり」とある。

②「大念には大念をみ、小念には小念をみる」(大集經意)『大正新脩大蔵經』第十三卷所収。親鸞は、『教行信証』「化土身土巻」(「真宗聖典」三七頁)に引用している。

③「檀波羅蜜の行」六波羅蜜(一、布施、二、持戒、三、忍辱、四、精進、五、禪定、六、智慧)の行のひとつで、布施行のこと。檀とはダイナミクスすること。波羅蜜とはパラミター(菩薩の実践行、仏に成るための行)。

(訳・語註…親鸞仏教センター)

私の二冊

(羽塚高照)

『深夜特急』(全六巻)

沢本耕太郎(新潮文庫)

「何のために」と聞かれても、いまでもうまく答えることができないようにないのだが、学生時代、私は長期休暇のたびに、大きな荷物を担いで、外国を旅して歩いていた。宿の予約もなく、たいした計画もない、往復の航空券だけをもちて出かける旅。それ自体が楽しく、帰りの飛行機に乗るころには、少しだけ自分が成長できたような、そんな微かな充実感があつた。

旅をはじめの前から、『深夜特急』のことは知っていたが、長い間、読むのをためらっていた。「バックパッカーのバイブル」を、へそ曲がりな私は敬遠していたのだ。そんなころ、その『深夜特急』がドラマ化され、TVで放送されることになった。それでも曲がったへそは直らずに、私はTVを見ずに、原作を読むことにした。案の定、すぐにはまってしまう。なかなか前に進まない旅にイライラしたり、沢木氏の切り取る景色に、自分の見てきたことを重ね合わせたりしていた。同じ景色を見ても、感じるこのよさの少なさに、ある種の挫折を感じたことをよく覚えていた。

あれから、いくらかの時が経った。もし、いまの自分がある時と同じ景色を見たら、いったい何を感ずるのであろうか。少しは、自分の成長を感じることができのらうか。



『聖典』の試訳（現代語化）

第十七条・第十八条は、「信仰に結論なし」という文脈のもとに言葉をつむいでいる。浄土の一步手前にある「辺地」という信仰的陥穽に墮ちたとしても、そこが行き止まりではないという。そこは疑いの罪をつぐなう場所であり、「結論」ではないと教える。

一方、第十八条の「布施」の問題もそうだ。どれほど布施をしようとも、信心がなければ無意味だという。布施をすることで信仰を確かなものとしようとするのは、ギブ・アンド・テークの論理である。布施の多少を信仰の結論にはならないという。ところが人間は、どうしても「結論」をつかみたがる。実は、それがあらゆる陥穽を生み出す因子である。『歎異抄』には、人間の出した「結論」を自己の根拠に据えてはならないという徹底批判が流れている。

（元囑託研究員・武田定光）

『歎異抄』試訳〈第十七条〉

原文

①^{へんじ} 辺地の往生をとぐるひと、ついには地獄におつべしということ。

この条、いずれの証文にみえそうろうぞや。学生^{がくしやう}だつるひとのなかに、いいい^{（言）}ださるることにてそうろうなるこそ、あさましくそうらえ。

経論^{きやうろん}聖教^{しやうぎやう}をば、いかようにみなされて

そうろうやらん。信心かけたる行者は、本願をうたがうによりて、辺地^{へんじ}に生じて、うたがいのつみをつぐのいてのち、報土のさとりをひらくとこそ、うけたまわりそうらえ。

信心の行者すくなきゆえに、化土^{けど}におおく

『歎異抄』試訳〈第十八条〉

原文

仏法のかたに、施入^{せにゅう}物の多少にしたがいて、大小仏になるべしということ。

この条、不可説なり、不可説なり。比興^{ひきやう}のことなり。まず仏に大小の分量をさだめんことあるべからずそうろうや。かの安養^{あんやう}浄土^{じやうど}の教主の御身量^{ごしんりやう}をとかれてそうろうも、それは方便報身^{へんぽんほうしん}のかたちなり。

法性^{ほふしやう}のさとりをひらいて、長短方円のかたちにもあらず、青黄赤白黒のいろをもはなれなば、なにをもつてか大小をさだむべきや。

念仏もうすに化仏をみたてまつるといふことのそうろうなるこそ、②^{けご} 大念には大仏をみ、小念には小仏をみる」（大集経意）といえるが、もしこのことわりな

んどにばし、ひきかけられそうろうやらん。

かつはまた檀波羅蜜^{だんぱらみ}の行ともいつべし。いかにたからものを仏前にもなげ、師匠^{ししやう}にほどこすとも、信心かけなば、その詮^{せん}なし。一紙半錢も、

仏法のかたにいれずとも、他力にこころをなげて信心

親鸞仏教センターの動き

（2006.12～2007.2）抄出

■2006年

12・1 情報誌「E・E」第12号、研究誌「現代と親鸞」第11号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第20号を発行。

12・5 第22回研究会（研究・交流・出版の協議と企画。以降、14回の会議を開催。第4回「唯信鈔文意」研究会）

12・7 第2回研究員と読む公開輪読会「いま新たに聞く『法然・清沢満之の世界』（他力門哲学）の論文を読む」②12／7 ③12／13 ④12／20（文京区・東京大学仏教会館2階ホール）

12・8 親鸞聖人ご命日のつどい

12・15 第80回英訳「教行信証」研究会

12・26 第52回清沢満之研究会

■2007年

1・12 親鸞聖人ご命日のつどい

1・16 第5回「唯信鈔文意」研究会

1・30 第3回（通算・第54回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

1・30 第7回英訳「教行信証」再版編集会議

2・7 第30回現代と親鸞の研究会「イスラーム教と現代の国際政治」国際日本文化研究センター助教授・池内恵氏（文京区・東京大学仏教会館2階ホール）

2・7 第2回研究員と読む公開輪読会「いま新たに聞く『法然・清沢満之の世界』（ミランダ王の問い）を読む」①2／7 ②2／14 ③2／21 ④2／28（文京区・東京大学仏教会館2階ホール）

2・15 第4回（通算・第55回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

2・19 第4回テーマ別研究交流会「現代日本におけるコミュニケーションの問題―持続可能な福祉社会とスピリチュアリティ―」千葉大学教授・広井良典氏（文京区・東京大学仏教会館2階ホール）

3・1 機関紙「親鸞仏教センター通信」第21号を発行。

テーマ別研究交流会報告②

人間（個・孤独）の精神の開け
とはどういうことか（その2）

親鸞仏教センター研究員 高 海 史

親鸞仏教センターでは、2005年度から「テーマ別研究交流会」を新たに立ち上げた。本研究交流会は、ひとつのテーマのもとにその専門分野の識者と親鸞仏教センターが問題・課題を共有しつつ、対話を重ね、交流することを目的としている。2005年度は、「孤独の身をどう生きるか」（全3回）をテーマに、サイコシネシス（psychosynthesis 統合心理学）の日本における第一人者であり、内科専門医の平松園枝氏を講師に、また、弁護士の高城俊郎氏（第1、2回はオブザーバー。第3回は講師）をお迎えし、その第3回を、2006年6月23日、有楽町の東京国際フォーラムで開催した（第1、2回は、本紙第19号で報告）。

本稿では、その折の本研究交流会の主宰者の発題、両講師による問題提起の要旨、さらには今後の展望を述べ、報告とする。

■ 親鸞仏教センター研究員の発題

第3回の研究会では、過去2回の研究会での平松園枝氏の問題提起を受け、まず、嵩と百々海真元囑託研究員から、今回のテーマである「孤独」についての発題を行った。

私たちが感じる「孤独」は、①「人間関係の分断によって引き起こされる感情」、②「人間存在として、この私はかけがえのない一人^{いちにん}なのだと気づいていく契機」の二つの意味に焦点を当てながら考えていくことができるのではない。また、孤独にさいなまれる精神が閉塞に向かわず、他者との交流を引き受け、関っていくようになるには、「受容」というのはたつきが大事なのではないか。

この発題を踏まえて、高城・平松両氏からお話をいただいた。

■ 高城俊郎氏の問題提起

高城俊郎氏からは、法律、社会学的な観点から、「現代社会における人間の孤独」について問題提起がなされた。高城氏は、「近代の法体系は、自由主義思想における人間の『意思』を



高城 俊郎（たかぎ としろう） 弁護士
1945年、埼玉県に生まれる。68年、中央大学法学部法律学科卒業。東京弁護士会所属。小池・高城総合法律事務所所長。専門は国内企業法務。著書に『いざという時の法律』（編著、金圖社）『倒産』（共著、有斐閣）ほか多数。「現代と親鸞」第2号に「現代経済社会から生じる人間の行動基準」を執筆。

根源に成立した」と述べ、その意思是、「法にとどまらず、多様な生活場面における人間の行動基準に影響を与えるものではないか」との見方を示された。さらに、ゲマインシャフト（Gemeinschaft 共同社会）、ゲゼルシャフト（Gesellschaft 利益社会）という社会学の用語を援用され、「現代社会は後者、換言すれば、合目的社会の面が色濃く人間の精神に影響を与え、その社会においては一人ひとりの存在が社会の目的に組み込まれてしまっている」と指摘された。

では、そういったあり方を変えていくにはどうすればいいのか。高城氏は、意思を根源とする人間観が生まれてきた思想的な背景を探るなかから、近代社会が依りどころとしてきた意思は、知能や脳機能から人間存在を見ており、その事実には重い意味を見だしつつも、その先にある、「自分の生まれる前のいのち、無数のいのちの広がりにおいてこそ、人間の連帯し得る



平松 園枝（ひらまつ そのえ） 内科専門医
1970年、京都大学医学部卒業。聖路加国際病院附属クリニック・予防医療センター長、サイコシンセシス研究会代表。日本ホリスティック医学協会顧問。著書に『好きな自分、嫌いな自分、本当の自分』（大和出版）、『<こころ>の定点観測』（岩波新書、分担執筆）、訳書に『意志のはたらき』『無条件の愛とゆるし』（以上、誠信書房）ほか多数。CDに『誘導イメージと音楽による心の別荘1-3巻』（ヒーリングバイブレーション社）。

根拠が出てくるのではないか。そこから人間を見る眼が生まれてくるべきではないかと考える」と話された。

■ 平松園枝氏の問題提起

続いて、平松園枝氏は、サイコシンセシスの観点から「孤独の身をどう生きるか」について話された。氏は、「サイコシンセシスは、精神分析で扱った問題の、原因の隠れている無意識のみでなく、存在の本質や他者、世界とのつながり、いのちの神秘、潜在的可能性などに関連する無意識（以前は、スピリチュアル。現在では、トランスパーソナル領域という）を含めて人間をとらえ、現実をよくするためにどうするかを提案する、人間科学の理論と実践体系である。

私たちの存在の本質は、高城先生のお話のように、いのちのつながりのなかの存在である、と同時に、個として独自の存在であることも強調する。つまり、半分普遍で半分独自ととらえる。ただ、現代社会では、この本質とのつながりを失いやすく、本来の自分や、他者や世界とのつながりは無意識に埋もれている。そして、自分で自分と思っている『小さな自分（サブパーソナリティという）』や過去の条件づな

ど、意識のいろいろな要素に振り回されていると心理学的にとらえる。

孤独のことをこの観点からとらえれば、そのように、自分自身の無意識に束縛され、つながりを感じないままに、個の尊重とか自由などの言葉が言われるなかで、孤独、寂しさ、空しさを感じているとも言えるのではないか。あるいは、現実にはゲームやパソコンで時間がつぶれ、寂しさすら感じないということもある。寂しさを感じる感性があることはまだ良いことで、『自分とはどういう存在か』『他者とはどういう関係か』を考え、気づききっかけにもなる。このように『自分を、他者を、世界をどうとらえるか』の『認知』という観点、そして、現代社会では、感情や感性が鈍くなりやすいという観点からとらえることもできると思う」と述べられた。

また、「認知が変わると主観的な世界がガラリと変わることは医学的にもよくある」ということで、その一例として、過換気症候群の患者さんの話をされた。「例えば、不整脈はよくある症状だが、本人にとっては不穏な感じで『死ぬのではないかと』と思い、不安のために過換気症候群になり、失神してしまい、さらに大変だということで救急車に乗る人は多い。ここで、医師の対応で、不整脈は気分が悪いが自分の場合は死ぬものではないとわかる、認知が変わることで、症状すら変わる。当人にとっては世界が変わる、ということを経験してきた。医師は患者が症状をどうとらえるか、認知を健全にするうえでの役割も大きい」と指摘された。

※全3回の研究交流会（平松園枝氏と高城俊郎氏の問題提起と質疑）の詳細は、『現代と親鸞』第13号（2007年12月号）に掲載予定です。

【お知らせ】

次年度のテーマ別研究交流会は、今年度の孤独、個という問題を、人間関係やコミュニティの観点から掘り下げ考えていこうと計画している。

● 清沢満之研究会報告 ⑤ ●

他力門仏教の救済

— 展現有限てんげんによる有限存在ほうせつの包摂 —

親鸞仏教センター研究員 伊 東 恵 深



清沢満之研究会では、2004年5月から「他力門哲学骸骨試稿」の読解を進めている。また、通常の研究会に加え、2006年1月13日には「清沢満之における内在と超越」と題して、東京大学大学院教授の竹内整一先生を、同年10月13日には「清沢満之における宗教と倫理」と題して、東京大学大学院教授の末木文美士先生をそれぞれお迎えし、講義をいただいた。

今号では、前回報告（本紙第17号）に続いて、「〔21〕自利利他〔上〕」から「〔29〕無限むげんの因果」までの研究内容について、その一端を紹介し、第3回（通算5回）報告とする（出典は『清沢満之全集』〈岩波書店〉とし、巻数と頁数を記す）。

なお、これまで3年間の研究成果については、研究誌『現代と親鸞』において詳細を報告する予定である。



■ 自利・利他・方便

清沢はこれまでの考究において、宇宙内の万有は各自、所動（受動）と能動（発動）の二つの動作をそなえたものであると論証してきた（「〔12〕心霊」、「〔16〕万有心霊」参照）。それを受けて「〔21〕自利利他〔上〕」では、所動とは、自己に不利なものは排斥して決して受用しないことから自利の作用であり、能動とは、他にはたらきかけて必ず利するものでなければならぬことから利他の作用である、と推究していく。

このように自利と利他は、万有の所動と能動の実際の正当なはたらきであるが、しかし現実



竹内整一氏を迎えての研究会



末木文美士氏を迎えての研究会

の人間（有限）の活動は、この正当な作用に自害と害他という正反対の作用が混じるために、紛擾・錯綜ふんじょう さくそうすることになる。それに対して神仏（無限）は、「〔22〕自利利他〔下〕」において、開発・発展を終えた存在であるから、そのような迷妄や混乱が生じることはない、と述べられる。そして、無限の自利の特性を「智慧」、利他の特性を「慈悲」と言い、この二つの特性から生じてくる摂化・救済のはたらきを「方便」と定義するのである。ここに無限の特質を見ることができよう。

ところで、無限による摂化・救済が提起されてくる必然性とはいったい何であるか。それを考察するのが「〔24〕救済ノ必要」である。

今有限ガ開展シテ無限ノ結果ヲ得ニハ必

スヤ因縁ノ中ニ无限元素ヲ具ヘサル可カラズ 而シテ因素ハ則チ現在ノ有限ナリ 故ニ无限ハ必ス縁素ニ存セサル可カラズ 即チ有限ノ因ヲシテ无限ノ果ニ達セシムルノ縁ハ其用无限タラサル可カラサルナリ

(第2巻66頁)

有限が開発・発展して無限に到達するためには、無限の縁が作用しなければならない。この有限にはたらく縁こそが、無限の方便なのである。

■ 自力門と他力門

次に清沢は、「〔6〕 自力力二門」での考察を受けて、宗教における自力門と他力門の差異について再考する。それが「〔25〕 自力他力」である。自力門とは、有限な自己の内に無限の性能が潜在していると信じて、自力の奮励^{ふんれい}によってそれを開発しようとするあり方である。それに対して他力門とは、有限な自己の外に無限の存在を認めて、その妙用に帰依・信順して身を投じるあり方である。清沢は前節で、「因素ハ則チ現在ノ有限ナリ」と述べて、無限による救済の必要性を説いていたことから、ここでは他力門に身を置いて論じていることが窺^{うかが}われる。

本節で清沢は、仏教で言う「一切衆生悉有仏性」説は真実なのか妄念なのか、と自問自答する。これに対してまず、「一切衆生悉有仏性」はもとより真理であって、いささかの虚偽もないと答えるのであるが、続けて「无限ニ関スル實際談ハ覚者（現実无限）自ラニアラサレハ到底之ヲ為ス能ハサルナリ 今吾子ト共ニ現実有限ナリ（中略）吾人相互ノ談義ハ是非トモ論理ノ軌道ニ拠ラサル可カラザルナリ」（第2巻67頁）と述べて、有限なるわれわれは、論理の道筋にしたがって有限と無限の関係を解明していくしかないと断言する。ここに、有限存在としての自覚に立脚しながら、しかも、他力門仏教の体系を理論的に語り切ろうとする清沢の思想的営為を、あらためて窺うことができよう。

■ 無限の因果と展現有限

清沢は「〔26〕 方便」において、方便とは有限心靈に対して無限の智慧と慈悲を運用する大いなる活路である、と言う。有限は真実そのものである無限をそのまま受用することはできない。したがって無限は、その本性を棄てて有限に接近しなければならないのである。清沢はこの無限の変容を、次のように述べる。

无限ノ変現トハ无限ガ変シテ有限ノ形式ニ顕現スルナリ 有限ノ形式トハ他ナシ 空間時間ノ経緯ニ於ケル因果の事業ヲ起シテ以テ有限通入ノ門戸ヲ開示スルニアリ（法蔵比丘ノ因因果海ノ徳相即是ナリ）

(第2巻70頁)

無限は、空間的・時間的に自己を限定して顕現することによって、有限（衆生）の摂取・救済を行うのである。それを清沢は、一如より形を現した法蔵菩薩（阿弥陀仏）の相^{すがた}に確かめていこうとする。ここに、法性法身と方便法身の関係を想起することができるであろう。

さて、「〔27〕 无限ノ因果」以降、そもそも因果とは有限内の理法であり、無限は本来、因果の道理を超絶したものであるにも関わらず、なぜ因果の形式をとって有限界に現出するのかという問題が、一貫して究明されていく。それは一言で言えば、迷妄する衆生を悲憫するがゆえに、無上位を棄却して迷界に自身を投入するからである。清沢は、このような無限のはたらきを「展現有限」と名づけて、有限存在を救済する無限の大悲心を表現するのである。

清沢は、無限がその功德を十方に開示すると、有限はその施与された功德を承認して受用する、と述べる。「開示」とは如来の回向であり、「受用」とは衆生の発信、すなわち信心を発起することである。ここに、清沢が再構築した他力門仏教の救済の論理が披瀝^{ひれき}されているのである。

※竹内整一氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第12号（2007年6月1日発行）に、末木文美士氏の講義と質疑は、同第14号（2008年3月1日発行）に掲載予定です。

第 4 回「親鸞思想の解明」シンポジウムを開催 (2006年10月31日)

親鸞仏教センターでは、2001年11月から、公開で、毎月1回、東京国際フォーラム (有楽町) を会場に連続講座「親鸞思想の解明」を開催し、さらに年1回のシンポジウムをとおして、講座で提起された課題を論点に、現代社会との対話を重ねている。去る10月31日開催の第4回シンポジウムでは、生命科学者の立場から、東京大学名誉教授・「場の研究所」所長の清水博氏をお招きし、「救済の生命場を求めて—科学と宗教の出会い—」をテーマに、科学技術の有用性と問題点、「場」という観点から生命をどのように捉えるのか、さらには、科学技術全盛の現代において、人間の存在意味をどのように押さえるのかなどを論点に、議論が深められた。有識者やサラリーマン、学生など約160名の参加者と共に、3時間半にわたる有意義な時間をもつことができた。

長年、「生きていることとはどういうことか」を科学のうでで研究してきた清水氏 (=写真上) は、基調講演で、「『生きていること』と『生きているもの』とは違う。『もの』として生き物を見ると、死ねば、生き物が物質になり、無くなってしまふ。それがこれまでの科学である。しかし、すべてそういう方法で認識せねばならないかと問えば、そこには限界がある。果たして、いのちを生と死に分けることができるのか。そこに、対照的・客観的に見るという、これまでの科学と異なりながらも矛盾しない、生命を『生きていること』と見る視点が大事である。そこに科学の、宗教との出会いの道が開かれるのではないか」(趣意)と、生命を同じく生きるものが互いに影響し合いながら呼応していく道を、『共存の場』として提唱された。

続いて、本多所長は「宗教が人間に与えている精神作用と、科学者が生命をよくよく見ていこうとすることは、決して別なことではない。われわれのこの世の『場』が、どれほど汚れていようと、不透明であろうと、『浄土』という純粹未来の『場』が与えられてあるということが人間の救いである。それが、親鸞が『凡夫でありながらたすかる』ということが言えた論拠であろう。清水先生のご提言は、ご自身の生命科学の言葉で、『本願』を解明してくださったと受けとめている」と述べた。

引き続いてのディスカッション (=写真下) では、休憩中に寄せられた聴講者からの質問や、約15名の助言者からの提言など、緊張感のある議論が展開された。科学と宗教の対話がどこで成り立つのか、「生命場」という人間救済の新たな視座をいただいたシンポジウムであった。

※このシンポジウムの内容の詳細は、「現代と親鸞」に掲載予定である。



親鸞仏教センター研究員と読む「公開輪読会」(3月)のお知らせ

■法然——念仏ひとつ (全4回)

テーマ:「選択本願念仏集」を読む

日時: 2007年3月7日(水)、14日(水)、22日(水)、28日(水)

いずれも午後6時30分～8時30分

担当: 高 海史 (かざみ ひろし) 研究員

御 礼

12月開催の「清沢満一—我が信念」(全4回、担当: 伊東恵深研究員)、そして、2月開催の「真理の探求—ギリシア人と仏教僧との対論」(全4回、担当: 羽塚高昭研究員)につぎましては、大勢の皆さまのご参加をいただき、意義ある輪読会となりました。御礼申し上げます。

あ と が き

いじめ事件から子どもたちの自殺の悲しいニュースが相次いでいる。子どもたちの心に、いまだのような変化が起こっているのか。そこには、家族や友だち、学校など、単体のみでは解決の糸口が見いだせないほど、社会全体の問題が複雑に絡まり合って、人間の生きる意味が問われているように思う▼人と人との間(あいだ)には、それぞれに異なった距離をもっているものである。人はよく「お互いに腹を割って話そう」などと言うが、どれほど関係の近い人であっても、腹を割って話などできるものではないという面がある。しかし、お互いに「感じ合える」感性が与えられていることも大事な事実であると思う▼教育社会学者の深谷野亜氏は、現代の子どもたちを取り巻く関係性を、「最近の子どもは、人間関係をつくるのが下手だ」とよく言われるけど、以前と比べると「下手」の質が、明らかに変わってきている。明るく、友だちに囲まれているようにみえても、空虚な人間関係しか築けていないケースが目立つ(朝日新聞2006年11月8日)と分析し、さらに「表面的な付き合いはいいのに、一歩踏み込むと固い壁がある。小中学校から大学まで、そういう子が結構多い。それでいて傷つきやすいので、壁をつくって内面に人を寄せ付けない」面がある」と指摘する▼いじめとはどういうことなのか。今回(上記、第4回)のシンポジウムで、「場の研究所」所長の清水博氏は、「みんな、ある人の居場所をなくするということ。つまり、生命に

■申し込みと問い合わせ

参加ご希望の方は、下記までご連絡ください。参加費は無料ですが、資料代(4回分・500円)をご負担願います。定員35名。途中からの参加も可。

親鸞仏教センター公開輪読会 T係

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901

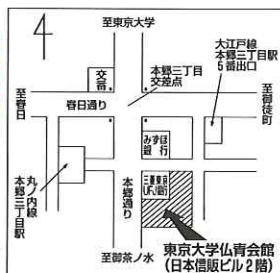
E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

http://shinran-bc.tomo-net.or.jp

■会 場

東京大学仏青会館2階ホール
(本郷三丁目・日本信販ビル2階)

東京メトロ丸の内線「本郷三丁目」駅徒歩3分
都営大江戸線「本郷三丁目」駅徒歩1分



対する危機を与え、追い込んでいくことを意味する。だから、追い込んだほうは自分の居場所にいるわけであるが、居場所を取られた人は、自分を表現する空間が奪われ、生きていけなくなる」と。本来、私たちの生命には、「ここに生命があるよ、ということ」を表現しようとする、生命の表現力というものがあるものである(趣意)と言われる▼児童文学評論家であり、青山学院女子短期大学教授の清水眞砂子氏は、「家族というふしぎ」(『an'jali』創刊号)のなかで、「ある学生は放課後、私の研究室にやってきて、『先生、少し休ませてください』と言った。こんな所より、家に帰って休んだほうがと言うと、彼女は答えたものである。『こんな疲れたところを親には見せられません。心配かけますから』と、学生の言葉に、心の裏(ひだ)に潜(ひそ)む大切な問いを聞かされている。そして、『いつもいつも家族はなごやかで居心地よくあるべきだって人はいうけれど、そうかしら。子どもはそんな中でなきゃ育たないなんてほんとかしら。いいえ、子どもは一日にほんの10分、一週間にほんの一日、あるいは一ヶ月にほんの二、三日、本当に幸福を感じる事ができれば、あとはつらくてもなんとか生きのびられる。みんなそうやって、生きのびてきたのではないかしら』と述べている▼あらためて、私たち一人ひとりが、現代の複雑な人間関係のなかで、日常のちょっとした言葉や様子から、強固でなく、むしろゆるやかなつながりを掘り起こしていく努力と、それを暖かく、また厳しく受け止める度量が求められているように思う。(長谷岡)